

対談・街興しと印刷業界

大阪市立大学大学院創造都市研究科・塩沢由典教授

不二印刷株式会社・井戸幹雄社長

大阪の顔・北区を芸術と創造の街に

「扇町創造村構想」の立ち上げと印刷企業のかかわり

第4次・5次産業としての発展を模索

大阪の正面玄関・大阪駅から始まる北区を包むほぼ一体を、21世紀につながるクリエイティブ街区として再生する「扇町創造村構想」が立ち上げられ、第3次産業に替わる第4次産業、第5次産業への足がかりを築くものとして各方面からの注目を集めている。同時に、娯楽や観光、芸術などの創造活動を促し、独自文化の情報発信拠点にしようとするこの構想の推進役のパートナーの1つとして、印刷業界に協力要請が行われ今後への対応が関心を呼んでいる。

大阪府印刷工業組合の支部の中でも、このエリアに該当する北支部の企業数が一番多く、歴史的にも多くの業績を残してきている。地場産業印刷の性質からも同地区企業の対応がクローズアップされるが、昨年12月16日、同構想を提言した大阪市立大学大学院創造都市研究科の塩沢由典教授と同研究科の小長谷一之助教授が、不二印刷株式会社（北区南森町）の井戸幹雄社長を訪ね、約1時間にわたって構想の概要説明をすると共に協力を促した。

デジタルカメラでの撮影から、企画、デザイン、コンピュータ編集などクリエイティブ作業の融合化とコラボレーション - ここに期待する塩沢教授とビジネス上の難しさを説く井戸氏との対談内容は、「デジタルというキーワードでシームレスに工程をつなげなければならない」印刷工程の現状課題を浮き彫りにするものとしても意味を持つ。塩沢教授と井戸社長の地域文化への貢献と印刷企業のかかわり対談を紹介する。

人口の集積と産業の集積

塩沢 大阪人自身が大阪に対するイメージをきちりと持っているとは限らない。自分たちで先端的な技術活動を作り出そうという機運はまだ出来ていないと思います。ですから時には仕掛けを試みることも重要で、そういうものがあって、みんなが動き出すことになり早くお互いに知ることもできるようになる。そうすると、その先を行こうとする人が出てくるということで、そうなれば大阪として独自のサイクルで動き出すのではないか。最後の目標はかなり大きいですが、今年あたりから第一歩を歩き出せばありがたいと思っています。

北区には多くの印刷会社がありますが、それぞれの企業が何をやっているのか、組合は詳細に把握しているのですか。

井戸 把握してはいません。広義の印刷業全体からいえば、組合に加入しているのは30%ぐらいでしょう。組織率は低いと思います。私もそうですが、印刷企業の社会性は低いといわざるを得ないのではないのでしょうか。

塩沢 個人でやっている印刷会社が多いのですか。

井戸 そういう企業も、法人化された企業も含めて全体として社会性は低くなる。これは先生もよくご存じだと思います。

塩沢 井戸さんの所はいろいろとパイオニア的にやっていてそんなことはないですよ。やはり小さい会社が多いのでしょうかね。

井戸 業界の統計では10人以下の企業が、全体の8割近くを占めているといわれます。

塩沢 独立される方が多いのですか。

井戸 資本力、資金力、それに一人ではできないという形が多くなってきましたので、最近は大掛かりな形では独立できなくなってきました。私どもでも全く異質な人材の集まりで、デザイン・企画、DTPをしている社員の半分ぐらいは芸大卒業生、残りの半分が芸術系の専門学校、残りの3分の1がいろんなところから集まってきています。また、カメラの方になると芸大卒ばかりです。

塩沢 宝塚造形大学の先生と話していて不思議に思ったことが一つあります。造形大学の卒業生がどこに就職していつているのか、会社名はある程度わかっているらしいですが、地理的にどこにいるかほとんど把握していないらしいです。だけど、大阪でも北区あたりに卒業生の多くがいるでしょうから、北区の、広い意味での創造活動をうまくプロモートすることが、大学自身にとっても一つの戦略になるのではないかと思いますね。

井戸 法制で一定平米以上の学校はできなくなっていると聞きますから弱いですね。

塩沢 工業等制限法で大学を新規でつくることはできなかったのですが、2年前にその規制は撤廃されました。

井戸 そうですか。工場の方は相変わらず規制が残っていますね。私ども、厳密にいうと工場なのかオフィスなのか、見ていただければわかるように……。

塩沢 私も一度、大阪市役所から頼まれて工業専用地の利用について調査をさせられたことがあります。最終的にどういう政策を持つべきか。工業専用地があるのなら、大阪で一番必要なのはもっと建蔽率を増やすことではないかと思いましたが。多少は音が出ても文句を言われなとか、いろんなことのために一定の地域を置いておく意味はあるとは思いますが。

市内で産業といっている多くのものはほとんどオフィスでやれるものですから、その区別なしに建蔽率を上げる方がいいと思っていますが、建築の人たちに「なかなかうまくいかない、斜線制限がある」とか、いろんなことを言われます。大阪の人口は350万人ま

で行ったことがあります。今は落ちてきていますので、もう一度人口回復をさせようと思っ

井戸 人口の集積と産業の集積の両方がないと都市の活性化はできないですからね。

塩沢 北区は技術家たちが結構住んでいるという意味でも特有の人々の集積地として注目していいのかと思います。もちろん外から通って来ている人たちも多いですが。

井戸 住みだしましたね。マンションが非常に多くなりましたから。

東京と違う文化と価値観

塩沢 そういう意味でこの北区を拠点にして、仕事ももちろん重要ですが仕事以外の活動でもお互いに交流できるようになって、それが新しい雰囲気を作り出していくことになればいいなと思っています。

井戸 そのとおりですが、仕事以外の活動が日本人というか会社人間は下手ですね。11月に1週間ほど、サンフランシスコ、シリコンバレーにいました。50キロかける100キロぐらいのエリアをシリコンバレーと称しますが、その中の会社に勤める人々には、会社の時間と自分の時間を上手く分けて生かしている。第二の仕事（セカンドワーク）に就くことに対して会社が何も言わないですから仕事を離れた出会いの場があって、そこでの話をしてすぐに協力者が見つかる。それが少し大きくなると創業の場になっていく。インキュベーターになっていくという形で自然発生的にできているようです。日本の場合の原点は、会社に縛りつけられているとか、セカンドワークを正式に認めないとか、時間外を会社以外の仕事に手をつけてはいけないとか、その辺の気風がインキュベーターを生まなかったり、新しい文化を生まなかったり、新しい産業を生まなかったりという形につながっていると思います。

塩沢 シリコンバレーはアメリカの中でも特有な文化とよく言われます。ボストン郊外やニューヨーク、ほかにも新しい産業集積としてテキサスのオースチンなどいろいろありますが、その意味ではシリコンバレーが一番開放的ですね。

井戸 先生のマップをもらっていただきましたのでサンフランシスコの街もたどってみました。大阪の街とどうオーバーラップさせるのかということを考えながら街を歩いて、その後にシリコンバレーに行きました。

塩沢 その意味では、大阪を考えると、シリコンバレーがアメリカ全体の中でどういう位置を占めているかということ参考になると、大阪が東京とは違う文化と価値観を持つということを含めて考えることも重要なことではないかという気がします。東京は日本全体として一番の集積地です。何においても規模は大きいですが、人口が大きすぎて全体を理解するということが非常に難しい街になっています。

私たちが学会や研究会で東京に行きますが、あまり夜遅くまで飲むことはできずに、みんな7時や8時になると「そろそろ帰ろう」という感じになってしまう。それに比べると大阪は遅くまで飲んでいても帰ることができる街。特に北区などに芸術家が住みだせば、もう少し遅くまで時間が取れることになると思います。

井戸　そういう街が欲しいです。欲しいですが、できない理由ばかり考えてしまう。(笑)

コンテンツ産業として輝いて

小長谷　なぜ私が印刷業界と親しくさせていただいているかというと、印刷業界がIT産業やデザイン産業と一番近いからです。先ほど井戸さんがおっしゃいましたが、シリコンバレーで僕が目撃したのは全部印刷とかデザイン産業が姿を変えてIT企業になっていますから、扇町創造村構想においてもそれが一番のカギになるかなと考えています。

キタを活性化するという動きの中で、大阪市の都市経営会議で先導的な企画を作ったり、計画局(計画調整局)でも総合計画にキタを入れようかという話があります。「芸術と経済」シンポジウム、「境界を越える」シンポジウム、扇町創造村祭り、エディターズハウスやファッションストリート創造など、具体的な話があるわけです。こういうものを一緒に行政に働きかけたり、あるいは組合として、青山や渋谷みたいな感じで、このクリエイターや会社が輝くような構造を出せば行政も動くのではないかと思います。

前後して途中で申し訳ないですが、そういうこともあってきょうお願いした次第です。ライブハウスやシテデザール(芸術家向けアトリエつきマンション)、原画の街など、塩沢先生からも非常に素晴らしい夢のある提案がたくさんあります。コンテンツ産業というか、デザイン産業として皆さんが輝いていただければいいかと思っています。

塩沢　大阪がなかなかそうした特徴あるエリアを作れないということもありますが、東京でも誰かがやるうとしてもできないことがいっぱいあると思います。

先ほどの話の夜遅くまで食べられるレストランということであれば、扇町周辺は新聞社があることによって結構夜遅くまでレストランが開いています。新聞社の記者が活動しているということだけのために世の中は変わってくるので、ここで一つまとまった運動が起これば、例えば「芸術家が集まる街」ということにしていくのはそんなに難しいことではないと思います。

扇町通りには洒落たイタリアン料理店ができたとか、そういうものがあることによって人を呼び込むことにつながる。芸術とか創造活動というものは文化全体と、もう一つは産業に結びついていくことが必要でしょう。

芸術家というのは、あまりお金のことは言いたくないという人種ですが、その辺は大阪人だから少し考え方を变えて、自分たちが儲かる仕事をしなければいけない。別の意識をうまく育てれば、大阪の場合は芸術のソフトについては値切りやすくして人が育たないと言

いますが、別の可能性があるのではないかと考えています。

小長谷 ジェトロ（日本貿易振興機構）の調査で、今アメリカではアニメ産業が鉄鋼業の3・2倍の売り上げになっていることが報告されています。アニメなどの付加価値を作り出していくデザイン産業の方が、ある意味で物造りよりはるかに大きい力があるわけです。印刷でも、企画部門あるいは、こちらで製品を持ち込んでカタログが編集されているわけですが、そうした力を結集していくと素晴らしいものが誕生するのではないかと思うのですが。

ネットワーク型産業の可能性と課題

塩沢 印刷屋さんの場合には編集なり何なり、基本的にはお客さんの要望があって、それを考えた上で実現していくのだと思いますが、写真屋さんもいればコンテンツを作る人もいるということで、ある意味ネットワーク型産業の要素があります。違う職種の人たちを結びつけるというあたりで大阪、特に北区はこれだけの印刷会社があるわけですから、少数でもそういうところがあれば大きな影響力を持ってくるのではないかと考えています。

井戸 不二印刷の中でご説明していきますと、カメラの分野もデザインの分野も企画の分野も全部、本来は印刷業の領域から外にはみ出しているものです。お客さんが印刷物を作ろうと思ったときに何を支援すればいいのか、ワンストップショッピングで一つの所に印刷物を依頼したいというご要望を、どのようにしたら受けられるのか、その可能性にビジネスのエリアを持って行っています。

ですからカメラマンの部分を侵食しています。北区のカメラストUDIOで一番大きな件数を取って、カメラマンが4人もおり、スタイリストもおり、荷物の整理をするパートを3人も4人も抱えている10人近いカメラストUDIOになっている。貸しスタジオは別にして、スタッフの数を揃えています。そういう意味で非常に異質な形です。本社の企画・デザイン部門の人数も約45人いますし、SEの部隊でも8人が9人います。

不二印刷の工業としての印刷生産ラインの中で、それだけの人間が最初の工程部分で働いて、工業の部分にあたる印刷工程では20人ぐらいしかいません。もっともパートを入れると40人ぐらいになってきますが、全体を見ると結果的にはソフト産業になっている。

だいたい一日に50トンぐらいの紙が入ってきて出て行く。50トン入ってくるといって、原料は8トンから10トンのトラックで入ってきますから5台とか10台という単位ですが、製品になると嵩が膨れますから4トントラックで10台とか20台。ですから、全く異質な形の中で印刷業は経営されているといえるでしょう。

カメラの分野、デザインの分野、画像処理の分野、印刷で作ったデータをインターネットコンテンツとしてすぐに形を変えてしまおうとか、それをデータベース化するというような仕事も、今までの印刷のジャンルから離れた異質な分野だと思っています。ですから、

そういうそれぞれ独立している人たちを、ネットワークを作って協業したり、あるいはものを創造していくというのは非常に難しい。私自身としてもネットワークが出来ないから自分の所で全部を取り入れてしまったというスタイルになっている。

できないからやらないではなしに、できなかつたら自分でやってしまえというスタンスです。社会性がないというか、それぞれ色々な顔を持っていて、私の所は1番バッターから9番バッターのラインアップの顔を出していきませんが、企業によっては4番バッターの顔が出てきたり、6番バッターの顔が出てきたりというような形で、コラボレーションをする場合の接点探しで条件を揃えのための難しさが出てくるのです。

私はビジネスとして捉えています。カメラグループの人たちはビジネスではなくて、芸術家あるいはクリエイターあるいはカメラの職人という顔が混在しています。私どものカメラ撮影の作業を見て、芸術性という観点から対処する人と、クリエイターあるいは職人という立場で見る人など、その視点角度によっては不二印刷のデジタル撮影には従っていけないと判断する人も出てくるでしょう。それを融合して一つの原動力にするにはどうしたらいいのか、悩ましい問題です。

これは、組合の関係者とかではなく、商工会議所の議員の一人としてその辺を何とかしなければいけないと思っているのです。だから、先生の扇町創造村構想にも協力をしていこうと考えているわけです。印刷業とIT産業のかかわりについても、基本論ではOKですが、各論になってくると「うーん」といわざるを得ないのもまた事実なのです。

塩沢 印刷業界に関しては、あくまでも地元の有力企業としての不二印刷さんを窓口として、ほかのアート系、クリエイティブ系の企業や人々とどのように展開していくか、こちらの動きをしていただければそれが模範になると思うのです。構想にご協力いただいて、ほかの印刷屋さんに刺激を与えていただければ、と思っているのです。

井戸 それはよく理解しているつもりです。

クリエイターに可能性ある街を

塩沢 創造現場が見える街やエディターズハウスなど、今度シンポジウムをしたいと思いますが、そのときには印刷のチャンピオンに出てきていただくということも大事なかなと思っています。

井戸 不二印刷として出て行くということについては理解していますし、了解もしています。ただ、大阪の創造村構想を実現するために、印刷業が要になれるかといえば、決して簡単なことではないと考えています。できない理由を言っているようで大変申し訳ないのですが、不二印刷をベースとした実態をお話させてもらいます、という形でお話しているだけで、決して先生の活動に対して反対だとか、賛同できない分野があるとか、それに対して対立しようという気持ちで言っているのではないことはご理解いただきたい。

塩沢 よく理解できます。いろんな業種の人を集めて成り立っているのは、ほかの印刷会社の場合はどうなのでしょう。

井戸 あまりないですね。当社は、コラボレーションする相手がないからどうしても自前でやっていかなければいけない、いわゆる地方都市型の経営です。

塩沢 それは扱われている商品とその必要性によって生み出された企業形態で、今後はそういうところも出てくるのではないかと思います。

私は印刷というのはよくわかりませんが、例えばファッションだとデザイナーがいて、発色を扱う職人がいて、生地を考える人もいて、いろんな職種の人たちが集まっています。でも、最終的に製品として出すのはどこか一つの工場。名前はいろいろで商社かもしれませんが、そこを通過して出てくるのですが、同じような構造が印刷の場合もあるのではないかと思います。

イタリアの場合ですと、一つの工場がデザイナーを抱え込む、染色職人を抱え込むということも普通で、一つの工場が何十人とか百人規模の所があります。ただ、扱うものが多様性や芸術性を要求されているので、それ以上大きくなる所は多くない。ベネトンみたいな特殊な事例は別ですが普通はそんな形でやっていって、新しい技術を導入したいときはその技術を待った人が招き入れられます。

大阪全体として、こんな技術を持っている人はここにいる、このデザインやこの技術はこの人に頼むというネットワークが作られれば、その場に応じた新しい組み合わせということで、日本でも西陣などはそういう格好でやっていたと思います。たぶん 21 世紀は、一つの大会社になっていくのがメリットというよりも、比較的小振りの会社がいくつもあって、お互いが協力していくという格好になってくるのではないかと思います。

井戸 当社も、いずれは分社化しなければいけないと思っています。管理できる人間がいつまでも広い分野にわたって管理できないと思っていますので、いずれ分社化する運命にあると思っています、今はその一つの過程だと考えています。

塩沢 写真なら写真でも、その人たちが芸術家としての自分もあれば、経営者としての自分も要求されると思います。その意味では、やはり分社化されるとか、場合によっては独立されて仕事をするということもあると思います。

井戸 近未来、5年や6年のタームで見ると、おっしゃるとおりの形になってくると思います。印刷業界の場合は、今はまだ、その他で独立している技術をデジタルというキーワードでシームレスにつなげなければいけない時だといえるでしょう。

塩沢 それは非常に重要な概念ですね。

井戸 それが確立できたら、それぞれがもう少し専門性を深めるところに行くべきだと考えています。

塩沢 先ほど、「シリコンバレーの場合はセカンドジョブをかなり自由にやれる。それがまた新しい産業を生み出す力にもなっている」と言われましたね。同じような構造は、北

区はこれだけの対応性と集積を持っていますから、うまく皆さんが考えれば、本業の邪魔になるのはもちろんいけません、むしろ本業を将来的には助けるような形でスピナウトしていくこともあるのではないかと思います。

井戸 先生がおっしゃるように、そういう場を社員にも作ってやらなければいけないと考えています。

塩沢 扇町創造村はクリエイターたちに楽しい街、可能性のある街であると同時に、周りの人がここに来れば質の高い芸術活動が楽しめる場所でなければいけないと思います。時間的にいえば、もう少し遅くまでいろんな活動がある。日ごろは忙しい人たちですが、食事の時や観劇の時はゆったりした時間がある。そういう重層性が必要であり、そういう中から本当の意味での創造性が生まれるのではないかと考えています。

印刷の機能は、文化創造の原点でもあるわけですから、この構想の牽引役の一人としてご協力をいただけるようお願いいたします。